

民主的性格の方向づけ (三)

倉橋惣三

二、相親しむ性、相信ずる性、
相敬する性

(イ) 民主的性格と人間性

民主的といふ言葉は、政治や經濟や社會組織の上では、生活の仕組み、しかた、従つて生活の形態に關することになる。しかし、人間の生活はしかたや形態だけに止まるものではない。その内に人間性の豊かな流動がなくてはならない。又、そのし組や形態が生れて來るものも、人間性に基き、人間性に出發するものである。その意味で、民主的といふことは、當然人間性を最も率直に發露させるものである前に、それ自身人間性の發露であるといへる。各個人が眞に人間的であることなしに、民主的生活は實現出來ないのである。

人間が人間の性格をもつといふことは、言ふも可笑しいやうなことであるが、遺憾ながら、必ずしもさうでないことがないといへない。抑へられてゐることがある。充進過敏の場

合もあり、冷却痲痺の場合もある。殊に屢々不純を免れない。或はそれが人間性の持ち前へで、神性のごとく常に眞純であり得ず、といつて、獸性の如くいづも露骨でないところに、人間があるのかも知れないが、人間性の完きを求めるところ人間があるのは確かである。

人間性は、生活經驗の間に育てられるが、生活經驗によつて種々の影響を被る。その點で、幼兒の人間性は、まだしつかりした倫理性を具へるとはいへないが、悪く複雑化されない單純さにゐる。その單純さから出るものとして、又、その單純さを害はないための要件として、明朗性を先づ重んじたのであつた(前號)。明朗性は、それだけで必ずしも倫理價値の充實してゐるものではないが、曇り濁らない貴さがあるほかに、暗く閉ざさないところに、人間性のすく／＼とした生長を容易ならせる幸福があるのである。すなはち、隠すところなく、自分を出し、隔てなく人を受けとり、晴やかな日光を、風通しのいゝ廣野に育つ草の芽のやうに、人間性の芽を、ぐんぐん伸ばし得てゆくのである。そして、快調な民主的性格を方向づけられるのである。

(ロ) 民主的人間性としての相親しむ性

その、民主的人間性の第一は、相親しむ性である。親しみとは、憎しみの反對といふよりは、人と共に居り、人と同じく感じ、人と和せずにおられない積極な心である。意見の衝突は欲望の動き方によることである。そこにいろ／＼のぶつ

かりが起るとしても、それは生活のおもてのことである。人間の性格は、もつと深いところで、少くも、もう少し内側のところで、人間同志の親しみを求めずにはゐられないのである。可笑しな例だが、羊が羊を好み、鳩が鳩を好むやうに、人間は人間を好む。何は兎もあれ互に引きつけあふ。そこに人間の相互關係の基礎があるのであり、相互から生れる對等關係の土臺もあるのである。これを、民主感情といつても、感情的民主性といつてもよいであらう。民主々義とは人間關係の合理性を主とするが、民主感情のない民主合理だけで、眞の民主的生活は生きたものにならない。

親しみの心は、親しむこと、親しまれることの經驗によつてのみ養はれる。この二つのどちらがさきかといふ順を理論上に立てることは出来ない。しかし、實際上では、親しまれること、少くも親しみの心を受けて貰ふこと、それを適當にかへして貰ふことなしには、親しみの生活を経験することは出来ない。従つて、その心を育てられることも出来ない。もつとこまかな實際では、幼児の方に此の心の豊に且つ純なるものがあつて、それに動かされるのが、われわれの常であるともいへるが、教育的には、親しみを受ける機會が、幼児にとつて、缺くことの出来ない大切なものである。それでこそ、幼児自身の親しむ心が始めて生活の上に實現せられるからである。況して、もしも、この心のゆがめられたり、薄められたりしてゐる幼児があつたとしたら、それこそ、親しまれることによつてのみ、この心が育てられる。

但し、こゝに一つの大切な點は、相親しむ性なんといふと大層際立つて聞えるが、そんな濃厚な心持や、強くあらはされる形を言つてゐるのでないことである。おとなの場合では、民主々義の要件としての人間愛といつた言葉も用ひられるだらうが、幼児の場合では、それも濃度において適しない言葉に普く位である。殊に相手に對する好惡のはげしい感情などは、時として、民主的とは別なことのものになつたりするものである。淡いが普通に、謂はば、誰れに對しても人としての相親しみをもてる性格の全的傾向、それがこゝで目ざしてゐるものである。

(ハ) 民主的人間性としての相信する性

信するといふことは、疑ひをもととして考へれば容易ならぬことである。確かな根據理由がなくては出来ないことであらう。しかし、人間同志の心持ちの關係としては、疑ふよりも信する方がもとである。欺かれたり、裏ぎられたりしない限り、先づ信じあふ方があたりまへである。少くもこゝで言つてゐる意味としては、特に疑ひあはない關係である。頂度、親しむ心を、特に愛するといふほどでない、好意の持ちあひとしたと同じ論法で、折角、信じ合ふといふ心を、その程度にしては物足りないとも見られるが、民主的性格の基本方向としては、それでよいのであり、その代り、それがなくては、民主的生活は生きて來ないのである。しかも、それだけでなく、親しむ心だけよりは、ずつと強い。親しむといふ主

觀感情よりも、相手を相手とする、人を人とする客觀性が、少くもそのもとが具つてゐる。相手を相手とし、人間を人間とすることなしに、決して民主的たり得ない、

單純ながら普遍な、相親しむ性が、幼兒にある如く、この單純にして普遍な相信する性が、幼兒の本來にある。それは非獨立としての必然であり、一種の自己保存だとも説明されるかも知れないが、そんな鋭い分析、生物学的な冷い解釋は別にしておいて、人間同志の關係として、滑らかな温かなものであり、その意味で美しいこと、疑ひを知らぬ者の幸福であるといへる。その美しさと幸福が、どうして破られ失はれてゆくのだらうといふことを考へる時、われ／＼おとなは、こまかに反省せずにはゐられない。その、單純ながら普遍の信に正しく應ぜずして失望を與へるのが、われ／＼の常だからである。子どもの親しみを感ぜないものは少ない。それに應ずることの足りない時々、のつれなさをついするとしても、その親しみに引きつけられずにはゐない。それにくらべて、子どもの信を、またしても軽く扱ふ。親しみに應じて、信に酬ひることが屢々缺ける。實際的には其の場／＼の處理を與へてやるにしても、信じて呉れる心そのものを重んずることが足りなくはないか。信ぜられることをうるさいとしないまでも、その心を貴ぶことを忘れはしないか。——そんな心なして幼兒の人を信ずる性をしなびさせはしないか。——そんなことをして、人と人との關係の正しさを本質とする民主的性格を養ふとしても出来るものではない。

子どもの信じて來る心を、正しく受けとらない以上、子どもといふものそのものを信じないに至つては、全く論外であると共に、案外われ／＼の實際内であるかも知れない。勿論、子どもの心を、子ども自身に代つて注意してやる必要がある。しかし、信じられないで、信ずる心を養はれることは出來ない。たまには欺かれるやうな結果になることはあつても、それが、子どもが欺かうとしてゐるのでないことが多い。それをおとなの複雑な心で、その手に乗らぬよといつたさきまわりで、不信の態度を示したりするのは、欺けるものなら欺いてみよと、不信を教へるやうなものである。欺かれても、心で信じてやる位でこそ、おとならしいともいへよう。殊に疑ふ力において一日の長たるよりは、信ずる力において強くてこそ、おとななのではあるまいか。

(二) 民主的人間性としての相敬する性

人を人として親しみ、人を人として信ずることを、一歩進めて言へば、人を人として敬することになる。但しこれは、進めて言へばで、子どもの心として、親から信へ、信から敬へと段階的に順のついでゐるものではない。殊に、おとなの場合でいふやうな際立つた心、わけても、ことあらたまつた形での敬ではないが、その心の動き方としては、たゞの親たゞの信よりは、一歩進んだ心持ちである。親は徹頭徹尾溶けあひである。信は前にもいつた通り、一味の客觀性を伴ふ、相手への關係である。これに對し、敬は、その相手へ

の客観性が一步進んでゐる。と同時に、相手との關係を、こつちのあり方において感じてゐるものといへる。尊敬といひ、謙遜といへば、幼兒の心として言葉の色が濃すぎるが、つまりは、謙のない敬はなく、その謙はこつちのあり方である。親や信だけには、必ずしもこの心は動いてゐない。ほのかながら此の心の動くところに、敬の特色があり、一步進んでゐるといふのもその意味である。

それに、親は、或は動物心理にある同類感にも似てゐる。信は弱者心理の依頼感と相通するところもある。敬に至つては、それこそ、動物心理には存しないもの、弱者心理とは全く別のもので、これこそ、眞に人間のなもの、最も民主的なものといへる。相敬してこそ眞に人間が人間に對する人間らしい關係であり、一點の弱者性をもたないのが民主的生き方である。

たゞ、この敬に至つて、一步進んでゐるだけに、親や信の純人間性と異なる社會性が混じて來て、同じ敬に、いろいろの質の異つたものが起る。殊も、封建的社會生活の所産としての敬の中には、敬の心が甚しく重視せられると同時に、甚しく非民主的なものも少くない。これはくわしくは別論に譲つた方がいゝと思はれるが、純一に人間なるが故に敬するといふ、眞の民主的敬の性こそ、幼兒の時から方向づけなければならぬ性格である。

秋晴の音楽

東京女高師
附屬幼稚園

菊池ふじの

天高の秋晴の唱歌の材料として。倉橋惣三氏作詞、井上武士氏作曲の「ス、メ ス、メ」を先づ第一に採りませう。この歌の歌詞をよく味はつて見ますと、一番は、紺碧の高い高い大空への憧れを、二番は、茫々たる廣い／＼大地への力を加へての憧れを、三番は見渡せど渾しなき遠い／＼前進への憧れを、つまり天地悠久へ 純な憧れを歌つてゐるのだと思ひます。私共保姆は、作詞者のこのこゝろを充分に理解して、子供達へ、この理想を何とはなしに傳へてやりたいと思ひます。曲も亦よくこの心持を表現して居ると思ひます。

指導法、初めに、幾回も伴奏を附けながら先生が歌つてやつて、この歌のリズムを子供の心の中に入れてやります。この度はこういふお唱歌を教へて上げますよ、よく聴いていらつしやい」と云つて先生が、弾きながら面白さうに歌つて居ますと、繰り返す中には子供は頭で拍子をとりながら、歌ひたげに、片言ながら口を動かしたりして來るものです。こうなつたところで、今度は、伴奏を一時止めて、單音か或ひは樂器なしで、言葉をよく教へながら、口授の形を取るのが一番早くそしてよく解る方法だと思ひます。かうして先づ、一番を何回も／＼も先生と子供と一緒に歌つて、歌詞も曲も